

# 稻積才才ヤチ古墳群

— 第2次調査報告書 —

2008年3月

富山大学人文学部考古学研究室

# 稻積才才ヤチ古墳群

— 第2次調査報告書 —

2008年3月

富山大学人文学部考古学研究室

# 目 次

## 例 言

### 第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯 ..... 黒崎 直 ..... 1

2 調査組織と調査の目的・経過 ..... 増永佑介・高橋浩二 ..... 2

第2章 稲積オオヤチ古墳群の位置と歴史的環境 ..... 高橋浩二 ..... 4

第3章 稲積オオヤチ古墳群の構成と既往の調査 ..... 高畠郁美 ..... 6

### 第4章 測量調査の成果

1 測量調査の方法 ..... 村上 直 ..... 10

2 測量調査の成果

  A4号墳 ..... 坂上菜美子 ..... 10

  A5号墳 ..... 細丸善弘 ..... 13

  A6号墳 ..... 坂田裕之 ..... 14

  A9号墳 ..... 橫幕 真 ..... 14

  A10号墳 ..... 松木綾子 ..... 16

  A11号墳 ..... 佐藤雄太 ..... 17

### 第5章 稲積オオヤチ古墳群の評価と意義

1 第2次調査成果のまとめ ..... 高橋浩二 ..... 19

2 稲積オオヤチ古墳群の評価 ..... 21

3 氷見地域における首長系譜の変動 ..... 24

## 図 版

## 抄 錄

# 例 言

- 1 本書は、富山大学人文学部考古学研究室が平成19（2007）年度に実施した、富山県氷見市稲積地内に所在する稲積オオヤチ古墳群の第2次調査の成果報告である。
- 2 測量調査は、氷見市教育委員会の指導と協力を得て、富山大学人文学部考古学研究室の構成員が実施した。
- 3 報告書の作成等は、4で記す学生が中心となり、調査参加者全員が協力して行った。写真撮影は高橋浩二が行った。
- 4 本文の執筆及び製図、写真図版作成は、黒崎 直（富山大学人文学部教授）、高橋浩二（富山大学人文学部准教授）、坂上菜美子、坂田裕之、佐藤雄太、高畠郁美、細丸善弘、増永佑介、松木綾子、村上 直、横幕 真（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）が担当した。
- 5 本書の編集は、高橋浩二が担当した。
- 6 調査図面等は、現在、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。
- 7 本書の作成にあたっては、大野 実氏・廣瀬直樹氏（氷見市教育委員会）、島田美佐子氏（跡富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）、西井龍儀氏（富山考古学会副会長）をはじめとする方々から御教示並びに御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 8 本書は、平成19年度富山大学人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系補完経費）の活動成果を含むものである。

# 第1章 調査の概要

## 1 調査に至る経緯

日本海に胸を突き出したような能登半島、その付根あたりに位置する水見市は、豊かな漁港をもち、かつ越中と能登をむすぶ海・陸路の要衝でもある。このような環境は原始・古代以来、不变のものであり、越中の人々は古くからこの自然の地形を最大限に利用して、隣り合う加賀や能登、越後などの人々と緊密に交流してきた。

そんな歴史的な事実を、あらためてわれわれに教えてくれたのが1998年10月に発見された「柳田布尾山古墳」の存在である。この全長107mの前方後方墳は、日本海側では最大級の規模を誇り、越中の古墳文化の中でも、とりわけ水見地域の古墳文化の重要性の再評価を迫るものであった。無論これによって、小矢部市域の古墳群の重要性が下がるというのではなく、これまでの理解が「俱利伽羅峠」越えという「陸路」を重視していたことへの反省を促す意味が重要である。そしてさらには、古墳文化の交流が「陸路」か「海路」かという二者択一的ではなく、より多面的な交流ルートの存在を暗示させる点が重要なのである。

こうして水見地域の見直しが始まる、引き続いて「阿尾島田古墳群」が発見（1999年11月）され、その群中に「前方後円墳」の可能性があるA1号墳の存在が注目を集めた。富山大学考古学研究室では、水見市教育委員会の協力などを得ながら A1号墳の発掘調査に取り組み、以下の諸点を明らかにした。すなはち全長約70mの前方後円墳であること、後円部中央に埋葬主体があること、そしてそこに全長7m余の木棺があり、内部には槍や劍、ヤスなどの鉄製品やガラス玉が副葬されていたことなどである。ただし古墳の年代については、古墳時代前期であろうことは推測できるものの、「柳田布尾山古墳」との先後関係などを判定する決め手を欠くのも事実である。

そこで2004年度から新たに「日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究」を立ち上げ、水見市域における前期古墳の調査研究に取り組んだ。この研究は科学研究費補助金事業として採択され、2年間にわたり A1号墳に隣接するA2号墳の発掘を行った。その結果、墳丘が方形であること、その中心部に長方形の墓壙が存在することなどを福認したものの、墓壙内には赤色顔料が散布されているにもかかわらず副葬品は一切遺存しておらず、残念ながらここでも年代等の詳細を明らかにできなかった。

そこで2006年度は、水見地域における古墳研究の新たな展開をめざし、阿尾島田古墳の西方に位置する稲積オオヤチ古墳群を測量調査しその概要を把握することとした。本古墳群も1999年に発見されたもので、その中心をなすA1号墳は、県下でも最大級の帆立貝形古墳（約47m）として注目される。阿尾島田古墳群と稲積オオヤチ古墳群、この隣接する2つの古墳群をセットで把握することにより、水見地域の古墳時代がより豊かに理解できるであろう。その結果、予想以上に新発見の墳丘が認められ、予定期間内では全体を調査することができなかった。このため2007年度は大学の経費をこれに充て、昨年に引き続いて稲積オオヤチ古墳群の測量調査に取り組んだ。

2年間にわたる測量調査の成果は、以下に報告するが、本年度には、本古墳群の別の支群に属する古墳5基が「能越自動車道」の路線内に含まれて発掘調査された。開発事業を前提とした調査であることは残念だが、いくつかの新所見が現地説明会として公表された。その成果も参考にしながら、本古墳群の性格がより深く解明されることを念願したい。

（黒崎 直）

## 2 調査組織と調査の目的・経過

稲積オオヤチ古墳群は、1999年11月に西井龍儀氏により発見され、同年12月から2000年5月にかけて氷見市史編さん委員会と富山考古学会を中心とするメンバーによって、古墳群の踏査とA1号墳およびA7号墳の墳丘測量が行われた。その結果、古墳群は17基以上で構成されること、またA1号墳は墳長約47.5mの帆立貝形前方後円墳であること、A7号墳は墳長約23mの前方後方墳であることが明らかにされた。その成果はすでに氷見市史7資料編5考古（氷見市史編さん委員会2002）や氷見市埋蔵文化財分布調査報告（氷見市教育委員会2001）として公表されている。

また、2006年には富山大学考古学研究室による調査が開始され、A1号墳の再測量とA2～A4号墳の測量、さらに新たに発見あるいは見直しがすすんだA13～A15号墳の測量が実施された（富山大学人文学部考古学研究室2007）。氷見市史編さん委員会、また富山大学考古学研究室等による調査成果の概略については第3章で述べることにしたい。

今回の第2次調査では、2006年に引き続いて測量を行った。調査目的は以下に示す通りである。

1. 未測量のA5号・A6号・A9号・A10号・A11号の各墳について、絶対高による測量図を作成し、それによって墳形や規模を明らかにすること。また、外部施設の有無を確認すること。埴輪や上器などの遺物を探索すること。
2. 第1次調査で測量を行った古墳、すなわちA1号・A2a号・A2b号・A3号・A4号・A13号・A14号・A15号の各墳との関係性を明らかにすること。そして、これらに未測量のA7号・A8号墳を加えて、古墳群の全容を把握すること。
3. 上記をふまえて、稲積オオヤチ古墳群の造営時期を検討するとともに、氷見地域さらには富山県内各地域における古墳との比較を通じて、その築造背景を探すこと。



写真1～4 伐採および杭打ち、測量調査風景

第2次調査は、以下のような組織を編成して実施した。8月1日に測量原点を設定し、適宜杭打ちと並行しながら古墳群内の草木の伐採を始めた。その後、8月5日に機材を搬入し、各古墳の測量を開始した。そして8月10日に調査が終了した。

調査の対象とする古墳および範囲は、A支群のうち第1次調査で実施した以外の範囲、つまりA4号墳から南へ伸びる尾根上に立地するA5号墳とA6号墳までの範囲、さらにA1号墳から南東へ伸びる小尾根上のA9号墳からA11号墳までの範囲である。なお丘陵南端にあるA7号墳とA8号墳の測量は諸般の事情で実施することができなかった。

測量の結果、前方後方墳1基（A5号墳）と方墳3基（A9号・A10号・A11号墳）を確認した。また、A4号墳の南側に小さな平坦面を確認した。A6号墳の位置には比較的広い平坦面が存在するが、明確な墳裾を確認することはできなかった。

調査にあたっては、水見市および水見市教育委員会、水見市立博物館、稲積地区の皆様に、多大な御協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げる。

(増永佑介・高橋浩二)

### 稲積オオヤチ古墳群第2次調査組織

調査主体：富山大学人文学部歴史文化コース（考古学）

調査責任者：黒崎 直（富山大学人文学部教授）

調査担当者：高橋浩二（富山大学人文学部准教授）

調査参加者：小林高太、高橋彰則（以上、富山大学大学院人文科学研究科学生）

赤座裕子、小川絵理香、北村志穂、小松彩乃、下嶋明日香、竹中庸介、柄堀哲彦、松岡治奈、

皆川恒子、山崎 翔、吉田有里、坂上菜美子、坂田裕之、佐藤雄太、高畠郁美、細丸善弘、

増永佑介、松木綾子、村上 直、横幕 真、今津和也、上原利予、千葉真吾

（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力：水見市教育委員会



写真5 測量調査参加者

## 第2章 稲積オオヤチ古墳群の位置と歴史的環境

水見市域は富山県の北西部に位置する。広大な富山平野とは二上山塊によって切り離された場所にあり、むしろ「能登半島の付根部」と表現した方が適当な地理的位置を占める。地形的に見ても、市域の北と西は標高200～500mの丘陵により、また東は富山湾によって画され、独立した小地域圏をなしている。

小河川沿いと海岸沿いには比較的小規模な平野が形成される。いまこの平野を仮に「水見平野」と表現する。平野内には北から、阿尾川、余川川、上庄川、仏生寺川の4つの代表的な河川が存在する。なお、かつて水見平野内には、仏生寺川と上庄川流域を中心に潟湖（ラグーン）が存在したと推定され、現在も十二町潟としてその名残を留める。また、余川川沿いにも潟湖（加納潟）の存在が推定されている。

稲積オオヤチ古墳群は、この水見平野の中では最も北側の阿尾川と余川川とに挟まれた丘陵上に位置している。標高は25～60mで、ここからは富山湾を一望することができる。古墳群の北側からは能登半島へと丘陵地帯が続いているが、逆に能登半島側から見れば、この付近で急に平野は開けていき、海上、陸上ともに越中と能登とを結ぶ交通の要所とも言えるような場所に古墳は築かれている。

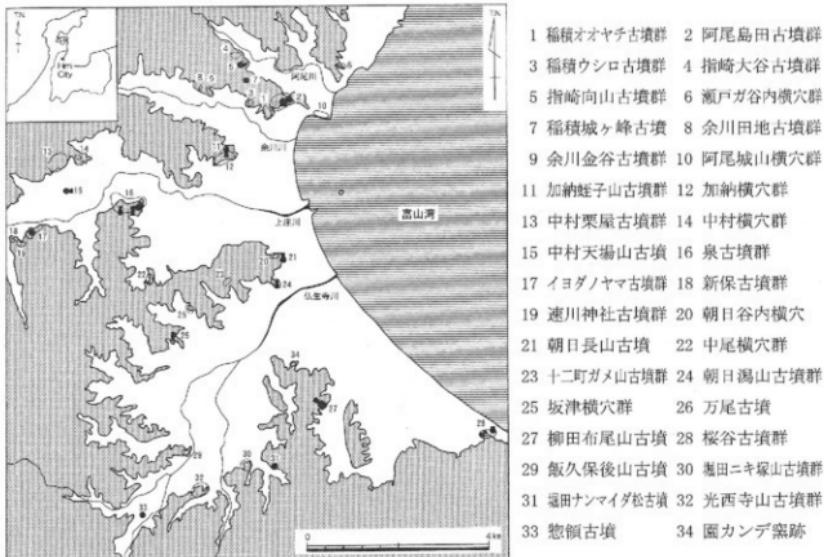
統いて、水見平野の古墳について、発掘調査が実施されたものを中心に概観してみよう。まず、前期古墳では、稲積オオヤチ古墳群と小さな谷を挟んで隣接する丘陵上に阿尾島田A1号墳（約70mの前方後円墳）が存在する。中心主体部には6.8mを測る直葬の割竹形ないし舟形木棺に内蔵し、ここからは鉄製の武器（槍1、長剣1、短剣5、鐵5）・農工具（刀子2、鋤1、鉗2、斧1、鎌鋸先2）・漁具（ヤス1）と、玉類（管玉24、ヒスイ垂飾1、ガラス小玉65、ガラス連玉1、錫小玉6）、碧玉（緑色凝灰岩）荒削品1、それに赤色顔料（水銀朱・ベンガラ）が検出されている。古墳は前期後半に比定される。仏生寺川流域には、前方後方墳としては日本海側最大の柳田布尾山古墳（107.5m）がある。さらに、ここから約3.8km南東の海岸沿いには、石劍5点等が出土した桜谷2号墳（約50mの前方後円墳）をはじめとする桜谷古墳群が築かれている。その他、上庄川流域には、日名田1号墳（約44mの前方後円墳）などが存在する。

中期には、上庄川流域に、横矧板鈍留短甲1と鉄刀2、鉄盤1、鉄鎧21、それに須恵器が出土したイヨダノヤマ3号墳（直径20.5mの円墳）が築かれる。その他、同流域には、泉1号墳（約43mの円墳）や上田1号墳（約44mの円墳）、加納蛭子山A1号墳（約33mの帆立貝形前方後円墳）などが存在する。

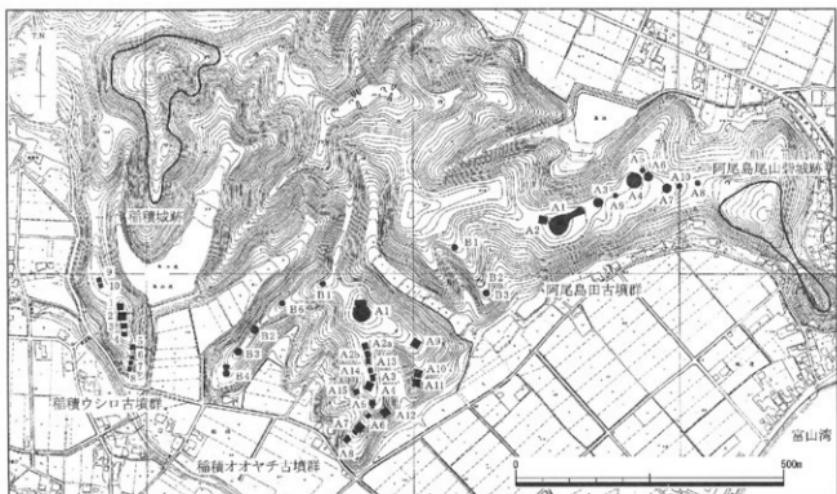
後期には、朝日山丘陵の先端部に、朝日長山古墳（推定43mの前方後円墳）が築かれる。ここからは鉄刀5、鉄剣1、鉄矛1、鉄鎧37以上、金銅張り胡籠金具3、刀子2、馬具（金銅張り杏葉2、鞍金具1）、金銅製冠帽片、管玉2、ガラス小玉6、須恵器、埴輪が出土しており、古墳は後期前葉に比定される。後期において、40mを越える前方後円墳は、他に小矢部市若宮古墳（墳長50mの前方後円墳）がある。富山県内で埴輪を有するのは、朝日長山と若宮の2つだけであり、両者は有力首長の古墳と推測される。

これ以降は、横穴墓がさかんに造営される。水見市における横穴墓の数は現時点で約131基を数える。横穴墓は、能登半島東部の七尾市にかけて多数確認されており、列島でも有数の集中地帯となっている。このように、水見市域には前期から後期を通じて、多数の古墳が存在し、また県内では数少ない大型古墳の築造がなされ、小矢部市域と並んで富山における古墳文化の搖籃・発展の地の1つであったと言うことができる。水見平野内に存在したと考えられる潟湖や富山湾を介しての海上交通及び漁労活動などの拠点的役割と、そして小河川や峠道を通じての能登半島との陸上交通の要衝としての役割とが、有力首長墳建築の社会的基盤になったことが推測される。

（高橋浩二）



第1図 稲積オオヤチ古墳群の位置と周辺の古墳・主要遺跡



第2図 稲積オオヤチ古墳群の立地と構成

## 第3章 稲積オオヤチ古墳群の構成と既往の調査

古墳群の構成と各古墳の特徴については、これまでに次のようなことが明らかにされている。

まず、古墳群はA支群とB支群に分けられる。A支群の古墳は、南側へ伸張する丘陵尾根上に存在する。3つの尾根が集まる最高所（標高57.8m）に築かれたのが、帆立貝形前方後円墳のA1号墳である。そして、ここから南へ下降する中央の尾根には標高約28mの尾根先端部までに、前方後円墳の可能性が推定されるもの1基（A2号墳）、前方後方墳1基（A7号墳）、方墳5基（A3～A6、A8、A12号墳）が確認されている。南東側へ伸びる尾根には、A9～A11号墳までの方墳3基が存在する。なお、B支群の古墳は、南西側の標高22～54mまでの尾根上にあり、ここには長さ約17mの長方形であるB1号墳と、直径14～22mの円墳4基が存在するとされる。水見市教育委員会2001および水見市史編さん委員会2002の時点では、このようにA・B両支群に合計して約17基の古墳が確認されていた。その後、2006年からは富山大学考古学研究室による調査が開始された。それでは最初に、A支群の各古墳について見ていくことにしよう。

A1号墳は、後円部を最高所に置き、北面に前方部を築いた墳長約46.5mの帆立貝形前方後円墳である。2006年の第1次調査での再測量で、全長が1m程小さくなることが分かった。後円部は直径約36.0m、高さ約6.9m、前方部は長さ約10.5m、幅約23.0m、高さ約1.8mで、後円部と前方部との比高差は約5.1mを測る。帆立貝形前方後円墳としては県内最大の規模を有する。また、後円部の南東面には長さ6.5m、幅11.0mの平坦面が存在し、これについては造出などの可能性も考えられるが確定には至っていない。

A2号墳については、約18.0mの前方後円墳の可能性が考えられていたが、約10.8×8.0m、高さ約1.4mのA2a号墳と、約11.0×7.0m、高さ約1.0mのA2b号墳の、いずれも長方形を呈する2基の方墳が接して築かれたものと判断するに至った。A2a号墳の北面には約7.5×6.5mの平坦面が認められる。

A3号墳は、約15.0×10.0m、高さ約1.1mの長方形を呈する方墳である。古墳の北側と南側には、尾根を横断する、いずれも上面幅約2.5mの区画溝が存在する。

A4号墳は、約17.5×15.0m、高さ約2.0mを測る方墳である。墳丘の東側から南側にかけては等高線が弧をなし、また西側は崖による崩落で埴堀の大部分が失われている。しかし、北側部分の埴堀は直線的で、また墳頂平坦面も約6.0×6.0mと比較的広い方形をなすことから、方墳と判断される。なお、A4号墳から西へ約2.0m離れた尾根下方には、約10.0×3.0mの平坦面が確認されたが、平坦面の主軸がA4号墳のそれとは異なり、古墳との関係性は判然としない。

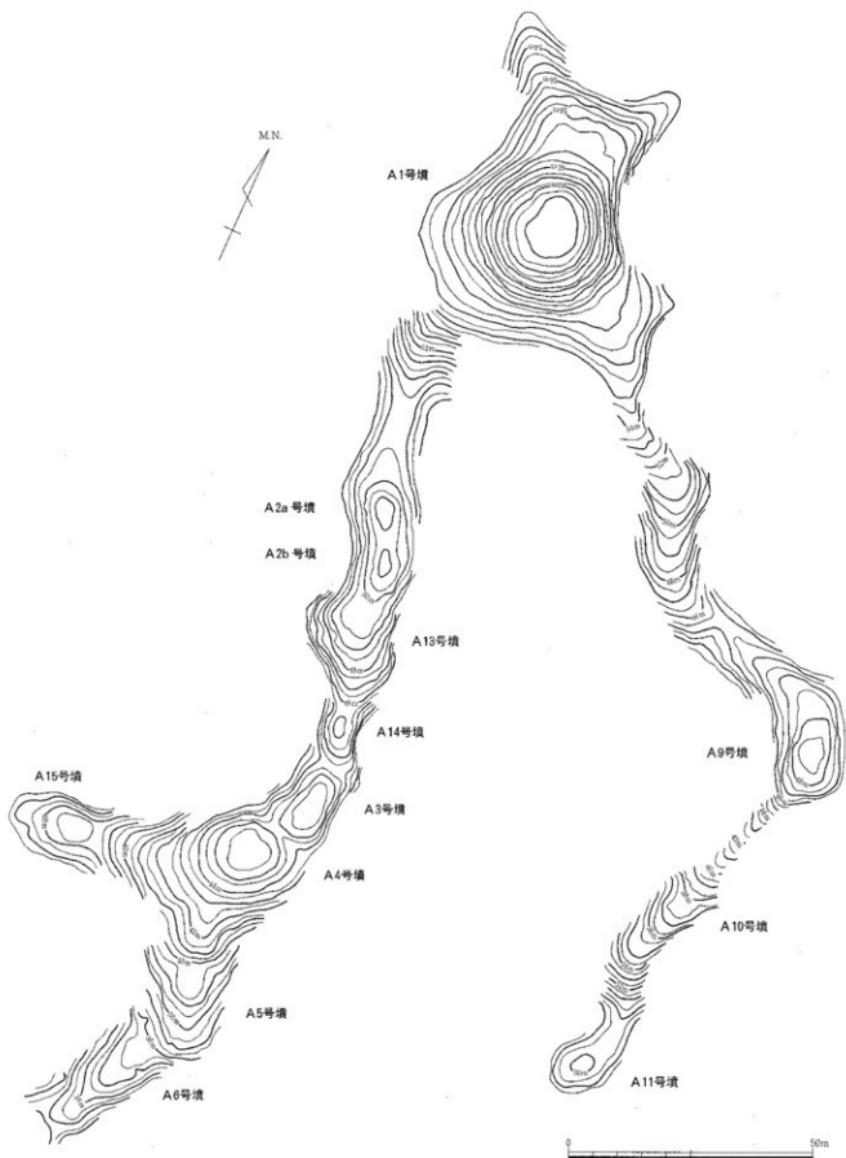
A4号墳から西へ約20mの位置では新たに古墳を確認し、これをA15号墳とした。約12.0×10.5m、高さ約0.4～1.5mの規模を測る、長方形を呈する方墳である。古墳の東側には、上面幅約2.5mの区画溝が存在する。西側埴堀部分の等高線が尾根下方へやや突出するが、これを前方部とする判断には至らなかった。

A5号墳とA6号墳は、方形の平坦面が離壇状に2段ずつ並び前方後方形状となる。しかし、埴堀の標高には高低差があり、墳形や規模の確定には至っていない。

A7号墳は、墳長約23.0mを測る前方後方墳と考えられる。後方部は長さ約15.0m、幅約16.0m、高さ約3.0m、前方部は長さ約6.0m、幅約5.0mを測る。後方部の背面は尾根を切断する区画溝によって築かれている。

A8号墳は、区画溝をもつ低平な方墳で、一辺約9.0m、高さ約1.0mを測る。

A9号墳とA10号墳は、踏査で確認されているものの、その特徴については報告はなされていない。



第3図 稲積才オヤチ古墳群A支群第1・2次調査地形測量図（縮尺1/1000、高畠製図）

A11号墳は、A8号墳と類似する古墳とされ、ともにA支群の中では低位置にある。

なお、氷見市教育委員会2001や氷見市史編さん委員会2002では、尾根の側面部にさらにA12号墳が推定されていたが、その後の検討によって古墳とは考えられず、氷見市遺跡地図（氷見市教育委員会2007）ではA12号墳は抹消されている。

そのほか、A2b号墳とA3号墳の間では、第1次調査で、古墳の可能性が考えられる高まりが新たに確認された。これを北側からそれぞれA13号墳、A14号墳と仮称した。前者は約8.5×5.5m、高さ約1.1m、後者は約11.5×7.0m、高さ約1.5mを測り、いずれも長方形を呈する方墳の可能性をもつ。ただし、現況は隅丸長方形状の平坦面や長楕円形状の高まりとなっており、いずれも墳裾は明確でない。

なお、いずれの古墳や平坦面からも段築や葺石は確認されておらず、埴輪や土器も検出されていない。

次に、B支群の各古墳について見ていく。B支群では、能登自動車道建設に伴い、2006年から2007年にかけて富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所によって発掘調査が行われた。

発見当初、方墳と考えられていたB1号墳は、調査の結果、東西約13.5m、南北約10.7m、高さ約2.2mの楕円形を呈する円墳であることが明らかにされている。墓壙や遺物は検出されていない。墳頂部には盃痕が確認されている。

B1号墳とB2号墳の間では、新たに円墳が発見され、これをB6号墳とした。規模は直径約9.0m、高さ約0.8mを測る。墳頂部は削平されており、墓壙はすでに消失したものと考えられる。

B2号墳は、直径約20.0m、高さ約2.4mを測る円墳である。古墳南面の尾根筋上には尾根を区切るように幅約3.5mの溝が認められる。墳頂部のほぼ中央には埋葬施設が1基存在し、長さ約7.5m、幅約1.4mの墓壙から、長さ約6.5m、幅約0.6mの割竹形木棺の痕跡が検出されている。遺物は出土していない。

B3号墳は、直径約22.0m、高さ約2.5mを測る円墳である。古墳東面の尾根筋上には尾根を区切るように溝が掘られている。墳頂部のほぼ中央には埋葬施設が1基存在し、長さ約5.0m、幅約2.1mの墓壙から、長さ約3.9m、幅約0.8mの割竹形木棺の痕跡が検出されている。棺内からは被葬者の頭部にあたる位置から管玉1点、泥岩製の巣玉2点、豎櫛1点が出土した。また、足下にあたる位置からは鉄製の長剣1点と刀子1点が並んで出土している。長剣の表面には鞘の木質部分が遺存する。また、墓壙の上面からは鉄製の鍔鋒先1点と土師器片が出土している。

丘陵先端部にあるB4号墳とB5号墳とはそれぞれ単独の円墳と考えられていた。しかし、調査の結果、両者との間に区画溝が存在しないこと、また屈曲は緩やかだがくびれ部が削り出されていることなどから、墳長約36.0mの前方後円墳であることが判明した。後円部を尾根最先端部に置き、前方部は後円部よりもやや高い尾根高所側に築く。後円部は直径約20.0m、高さ約2.1mで、前方部は最大幅約23.0m、高さ約2.4mを測る。前方部前端がひらき、また後円部に比べて前方部の方が高い。墳丘主軸は南北方向で、尾根にはほぼ並行する。埋葬施設は後円部に2基、前方部に1基確認されており、いずれも墳丘主軸に直交する。後円部中央に存在する墓壙（SK1）は長さ約4.3m、幅約1.8mを測り、ここからは長さ約3.6m、幅約0.8mの直葬の割竹形木棺の痕跡が検出されている。棺内からは鉄刀1点と束になった鐵鎌（長頭鎌）10数点が重なって出土した。鉄刀切先の向きから、頭位は東方向と推定される。頭部が推定される位置からは赤色顔料が検出されている。SK1の北側に位置する墓壙（SK2）は長さ約3.2m、幅約1.4mを測り、ここからは長さ約2.7m、幅約1.0mの直葬の組合式箱形木棺の痕跡が検出されている。遺物は出土していない。前方部の墓壙（SK3）は長さ約3.7m、幅約1.6mを測り、ここからは長さ約2.6m、幅約0.6mの直葬の割竹形木棺の痕跡が検出されている。棺内からは鉄刀と刀子が各1点出土している。棺内床面および側面の一部には赤色顔料が残る。

なお、B支群のいずれの古墳からも段築や葺石、埴輪は検出されていない。

B2号墳とB3号墳の中間地点と、それからB4号墳前方部の前面には、古墳築造以降のものである堀切が存在する。

(高畠郁美)

## 参考文献

- 側富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2007『能登自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告 加納谷内遺跡隣接地 稲積オオヤチ古墳群 宇波西遺跡』
- 側富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2007『水見市稻積オオヤチ古墳群 現地説明会資料』
- 富山大学人文学部考古学研究室2007『稲積オオヤチ古墳群－第1次調査報告書－』
- 水見市教育委員会2001『水見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）』I
- 水見市史編さん委員会2002『水見市史』7資料編5考古、水見市
- 水見市教育委員会2007『水見市遺跡地図[第3版]』

第1表 稲積オオヤチ古墳群一覧表（第2次調査の成果を含める）

古墳名	墳形	墳形および規模、各部の計測値、埋葬施設と出土品
A1号	粒状斜面墳	墳長約46.5m、後円部直径約36.0m、高さ約6.9m、前方部長約10.5m、幅約23.0m、高さ約1.8m
A2a号	方墳	約10.8×8.0m、高さ約1.4m
A2b号	方墳	約11.0×7.0m、高さ約1.0m
A3号	方墳	約15.0×10.0m、高さ約1.1m
A4号	方墳	約17.5×15.0m、高さ約2.0m
A5号	前方後方墳	墳長約12.5m、後方部一辺約9.0m、高さ約0.75～1.0m、前方部長約3.5m、幅約4.0m、高さ約0.3m
A6号	方墳	約9.5×4.0m の平坦面
A7号	前方後方墳	墳長約23.0m、後方部長約15.0m、幅約16.0m、高さ約3.0m、前方部長約8.0m、幅約9.5m
A8号	方墳	約9.0×9.0m、高さ約1.0m
A9号	方墳	約13.0×5.5m、高さ約0.7m
A10号	方墳	約10.5×6.5m、高さ約0.7m
A11号	方墳	約9.0×7.0m、高さ約0.5m
A12号	抹消	
A13号	方墳	約8.5×5.5m、高さ約1.1m
A14号	方墳	約11.5×7.0m、高さ約1.5m
A15号	方墳	約12.0×10.5m、高さ約0.4～1.5m
B1号	円墳	約13.5×10.7m、高さ約2.2m
B2号	円墳	直径約20.0m、高さ約2.0m、墓壙長7.5m、幅1.4m、割竹形木棺長6.5m、幅0.6m
B3号	円墳	直径約22.0m、墓壙長5.0m、幅2.1m、割竹形木棺長3.9m、幅0.8m 棺内：鉄劍1・刀子1・管玉1・棗玉2・堅櫛1、棺上：鍊鈎先1・土師器
B4号	前方後円墳	墳長約36.0m、後円部直径約20.0m、前方部長約16.0m、幅約23.0m SK1(後円部中央)：墓壙長4.3m、幅1.8m、割竹形木棺長3.6m、幅0.8m、棺内：鉄刀1・鐵鏃10余・赤色顔料 SK2(後円部北側)：墓壙長3.2m、幅1.4m、箱形木棺長2.7m、幅1.0m SK3(前方部)：墓壙長3.7m、幅1.6m、割竹形木棺長2.6m、幅0.6m、棺内：鉄刀1・刀子1・赤色顔料
B6号	円墳	直径約9.0m、高さ約0.8m

## 第4章 測量調査の成果

### 1 測量調査の方法（第4図）

測量原点Oは、A1号墳後円部墳頂の中心に設定した。そして、原点Oを基準にA1号墳から南側へ伸張する丘陵尾根上の古墳を中心に杭を設定していく、K14杭をA4号墳墳頂部に設定した。また、A1号墳の南側墳壙付近に1-3杭を設定した。これらは第1次調査に伴って設定したものである。

第2次調査にあたっては、K14杭の南へK14-1～K14-8までの杭を、また1-3杭の南東へ1-3-1～1-3-13までの杭を設けた。杭の設置場所は、およそK14-3杭がA5号墳墳頂部、K14-5杭がA6号墳墳頂部にあたる。また、1-3-1杭がA1号墳南東側の平坦面上、1-3-7杭がA9号墳墳頂部、1-3-10杭がA10号墳墳頂部、1-3-13杭がA11号墳墳頂部にあたる。

なお、測量原点Oの標高は、水見市阿尾の一等水準点（点名9316、標高6.494m）から、光波測距機を用いて計測した。これをもとにして、縮尺1/100、等高線25cm間隔により、平板測量図を作成した。

（村上 直）



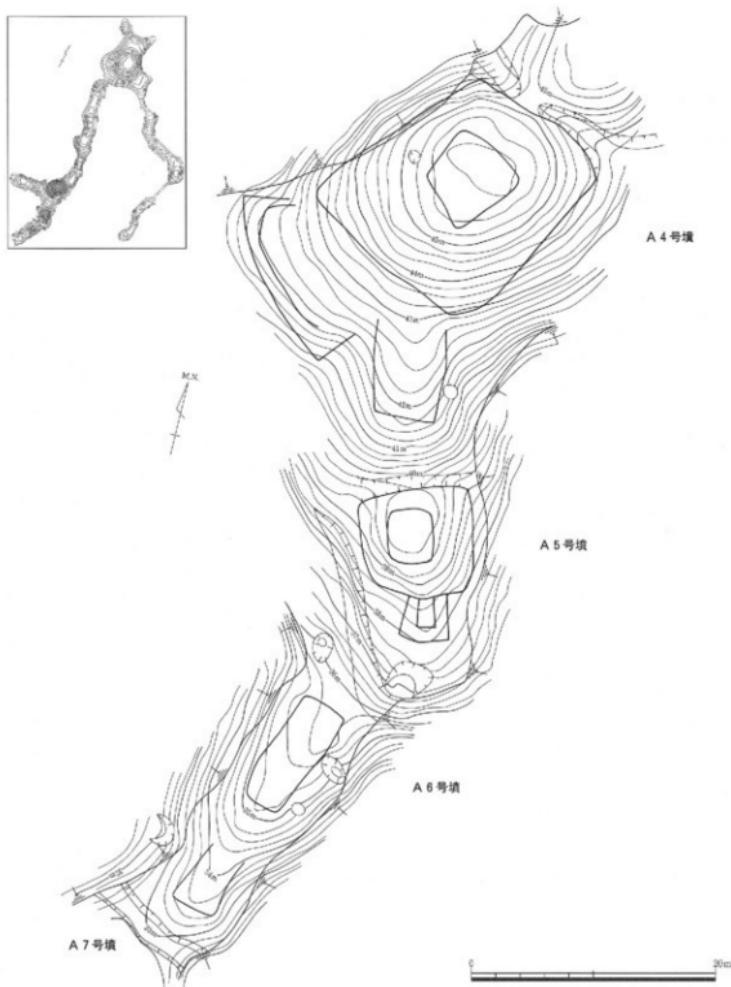
第4図 稲積オオヤチ古墳群調査区基準杭と配置図  
(縮尺1/1600、村上製図)

### 2 測量調査の成果

#### A4号墳（第6図）

本墳は第1次調査で一度測量を行った古墳であるが、南側に新たに平坦面が確認されたため、古墳との関連性について報告する。

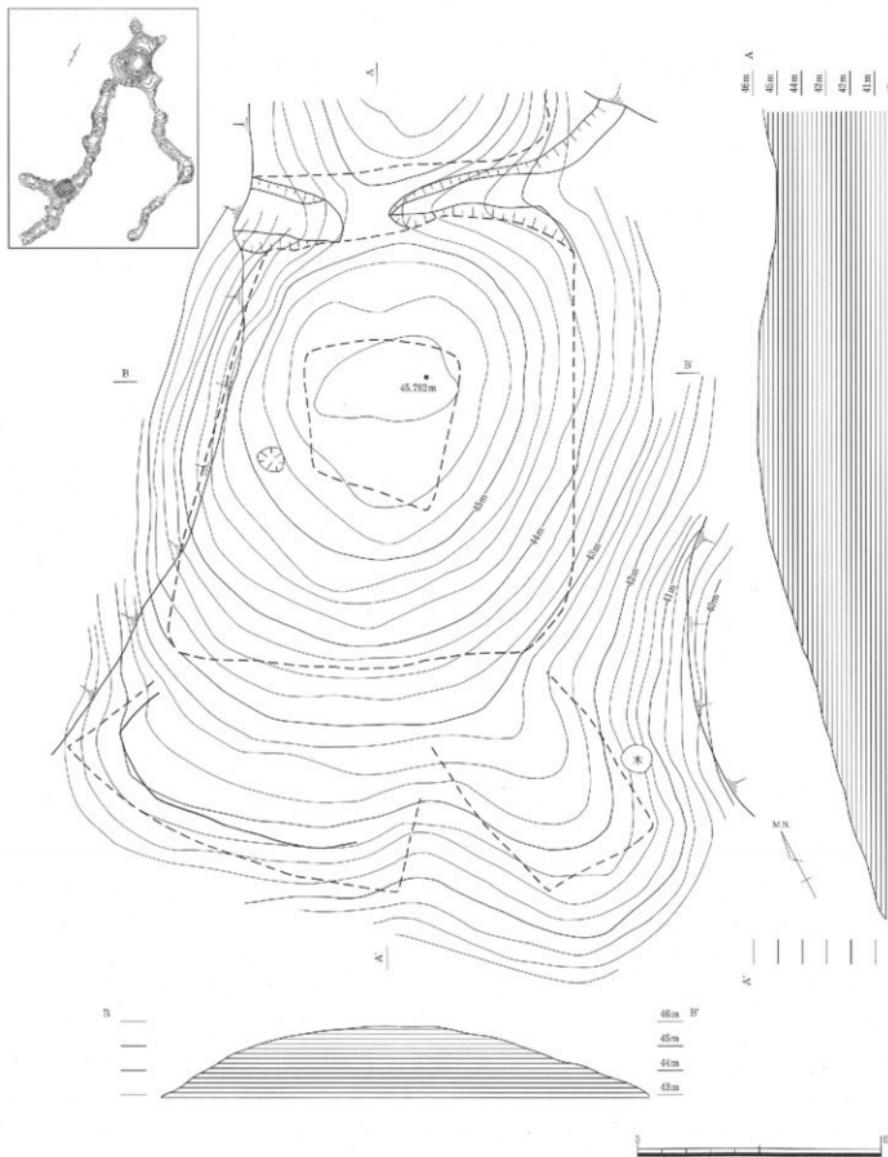
はじめに、古墳について述べる。本墳は、A3号墳から南西へ約3m、標高約45mの尾根上に位置する。南北約17.5m、東西約15.0m、高さ約2.0mの方墳である。墳頂平坦面の規模は南北約6.0m、東西約6.0mである。墳頂最高点の標高は45.792mを測る。墳壙は、東側で43.000～44.250m、南側で42.750～43.000m、北側で44.000～44.250mの等高線の間にそれぞれ位置する。墳丘の西側は崖面となるが、コーナー部付近



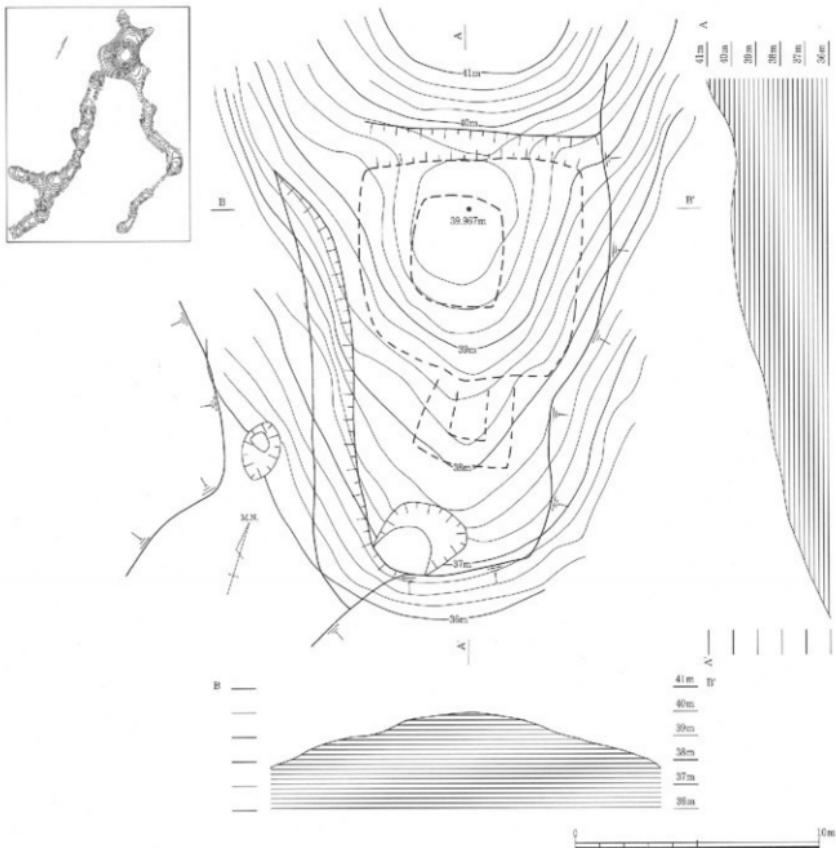
第5図 A4号～A6号墳測量図（縮尺1/400、高畠製図）

は崩落を免れており、北東コーナー部では44.000m、北西コーナー部では43.000mの等高線上に墳壠が推定される。

今回の調査では、A4号墳の南東コーナー部から約1m離れた尾根下方の地点において、標高41.750～42.750mの等高線が南側へ長方形状に張り出していることが確認された。ここに長軸約7.5m、短軸約5.0mの平坦面が存在するものと判断した。平坦面には溝などの区画は見られない。平坦面の東側と南側は比較的急な傾斜面となっている。また、A4号墳の南西コーナー部から約2m離れた場所には、ほぼ同じ標高



第6図 A4号墳測量図（縮尺1/200、板上製図）



第7図 A5号墳測量図（縮尺1/200、細丸製図）

に、一回り大きな平坦面が存在する。規模は長軸約10.0m、短軸約3.0mを測る。

これら2つの平坦面の評価であるが、両者ともA4号墳の主軸とは方向が異なり、またA4号墳の墳裾とは0.5~1.0m程度の高低差を有しており、したがってA4号墳との関係性は判然としない。(坂上菜美子)

#### A5号墳（第7図）

本墳は、A4号墳から南へ約13m、標高約39mの尾根上に位置する。従来は方墳とされていたが、測量の結果、墳長約12.5mの小型の前方後方墳であることが明らかになった。後方部の規模は南北約9.0m、東西約9.0m、高さは南側で約0.75m、東側で約1.7m、西側で約1.0mを測る。墳頂には南北約5.0m、東西約4.0mの方形を呈する平坦面が認められる。後方部の墳裾は東側で38.000~39.000m、西側で38.500~39.250m、南側で38.000~38.750m、北側で39.000~39.750mの等高線の間にそれぞれ位置する。墳頂最高

点の標高は39.967mを測る。後方部の北側墳裾に接しては幅約1.2mの深い溝が存在する。

前方部は後方部の南面に存在する。当初は方墳に伴う小さな平坦面と考えられたが、等高線が南側へ緩やかに突出し、また後方部との接点では等高線がくびれ部状に巡り、よって前方部と判断するに至った。前方部の規模は南北約3.5m、東西約4.0m、高さ約0.5mである。前方部の墳裾は東側で38.000m～38.750m、西側で38.400m～38.500m、南側で38.000m～38.250mの等高線の間にそれぞれ位置する。前方部の墳頂最高点の標高は38.655mを測る。後方部墳頂との比高差は約0.3mである。前方部側には溝のような区画は認められない。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また、埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(細丸善弘)

#### A6号墳（第8図）

第5図に見るに、A5号墳から南西へ3m程いくと尾根が急斜面となって、36.000m～37.000mの等高線の間隔が狭まる。この急斜面の下は一段低くなつて比較的広めの平坦面となる。そして、再び35.000mの等高線から下側に小さな段がつく。この南北約9.5m、東西約4.0mの長方形を呈する平坦面を古墳として認識した。A5号墳との間隔は約8.0mを測る。第8図のように長方形を呈する比較的広い平坦面を古墳として認識したが、しかし東側と西側の側面は崖面となり、また北側と南側にも溝などの区画は存在しない。したがって、明確な墳裾を把握するには至らず、古墳の規模についても明らかにすることはできなかった。墳裾はすでに消失したものと考えられる。

なお、A6号墳から約4.5m南へいった位置には、南北約5.5m、東西約3.5mの狭小な平坦面が認められる。

この平坦面からさらに南へ約4.5m、A6号墳からみると南へ約14.5mの位置にはA7号墳が存在する。A7号墳の北側墳裾に接しては、尾根を横断するように、上面幅約2.5m、下面幅約1.5mの溝が存在する。

(坂田裕之)

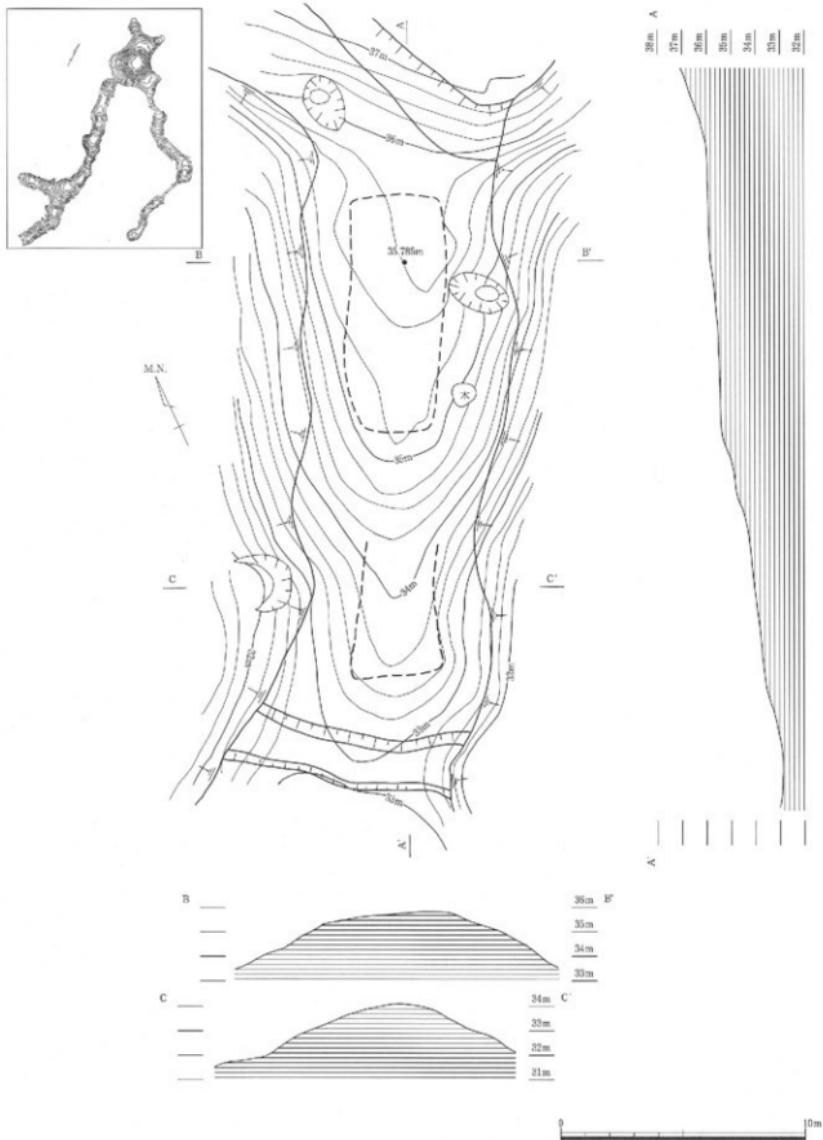
#### A9号墳（第9図）

本墳は、A1号墳から南東へ約88m離れた、標高約48mの尾根上に位置する。墳形や規模については従来不明確であったが、今回の調査によって南北約13.0m、東西約5.5m、高さ約0.7mの長方形を呈する方墳と推定するに至った。墳頂部には南北約5.5m、東西約4.5mの方形を呈する平坦面が認められる。墳頂最高点の標高は48.705mを測る。

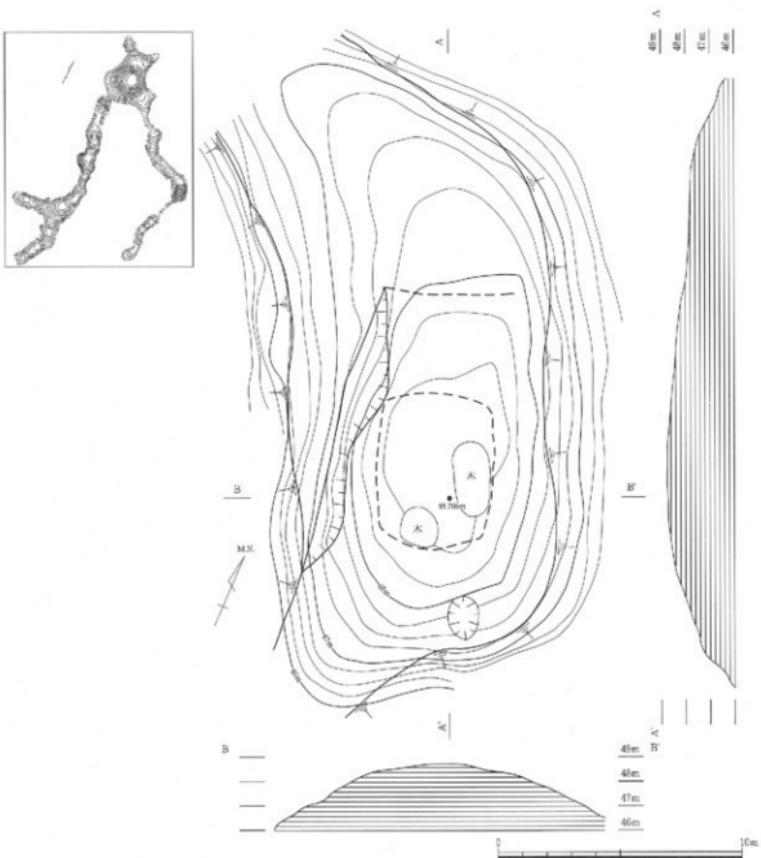
墳裾は、北側で48.000mの等高線付近に位置する。北西側から緩やかに上ってきた尾根は、この付近で傾斜を変えており、自然地形の削り出しによって墳裾が築かれていることをうかがわせる。他の辺については、とりわけ西側では崖による崩落が激しく、墳裾はすでに消失したものと考えられる。ただし、南側から東側にかけては48.000m前後の等高線が隅丸形状に巡っており、比較的旧状を留めているよう感じられる。このように、北側の墳裾の状況や、南側から東側にかけての等高線などから、墳形や墳丘の規模を推定した。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また、埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

A1号墳とA9号墳の間、すなわちA9号墳から北西へ約26mの地点には尾根の落ち込み部があり、そこに上面幅5.0～6.0m、長さ約6.0m、深さ0.2～0.7mの尾根筋と直交する壠状の遺構が存在する。ただし、尾根の片側分までを掘削するだけで、尾根を完全には切断していない。その状況から、山城に伴うような



第8図 A6号填測量図（縮尺1/200、坂田製図）



第9図 A9号墳測量図（縮尺1/200、横幕製図）

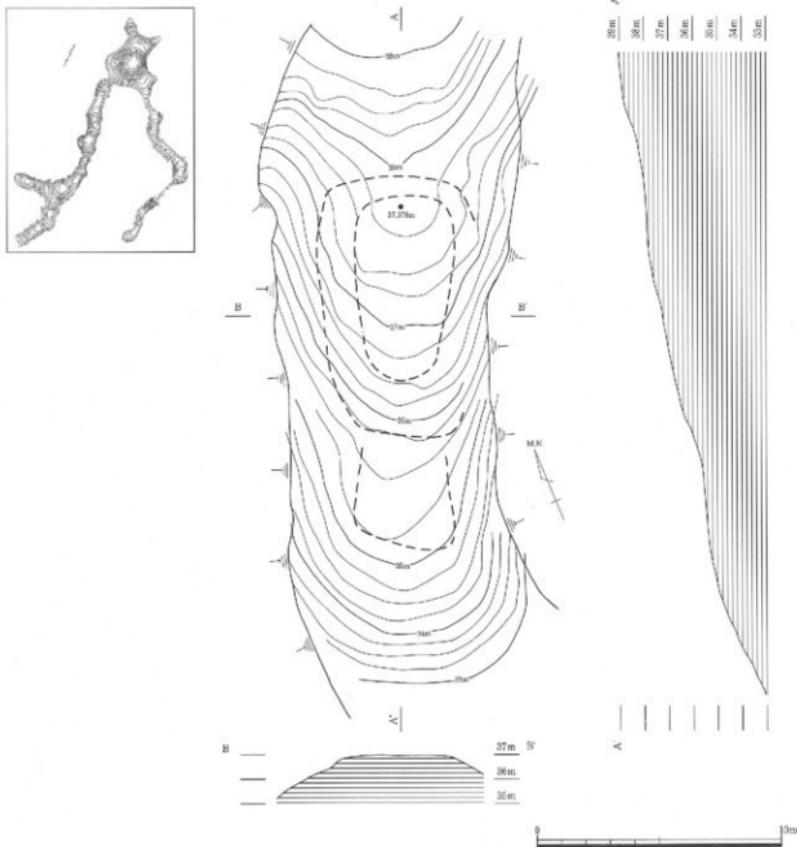
空堀と推定される。ちなみに、この掘状の遺構は、西井氏と氷見市史編さん委員会による調査ですでに確認されていたものであり、今回具体的に規模などが把握されるに至った。

(横幕 真)

#### A10号墳（第10図）

本墳は、A9号墳から南へ約35m、標高約37mの尾根上に位置する。南北約10.5m、東西約6.5m、高さ約0.7mの長方形を呈する方墳である。墳頂部には南北約7.5m、東西約4.0mの長方形を呈する平坦面が認められる。墳頂最高点の標高は37.978mを測る。

墳裾は、西側で35.750～37.250mの等高線の間、南側で35.750mの等高線付近にそれぞれ位置する。北側では37.750mの等高線が大きく歪み、ここに小さな平坦面が形成される。北側の墳裾はこの小平坦面がある37.750～38.00mの等高線の間に想定される。東側は崩落が見られ墳裾の大半は確認できないが、コ-



第10図 A10号墳測量図（縮尺1/200、松木製図）

ナー部付近は辛うじて損壊を免れており、南東コーナー部では35.500m上、北東コーナー部では37.500m上の等高線付近に墳裾を推定することができる。

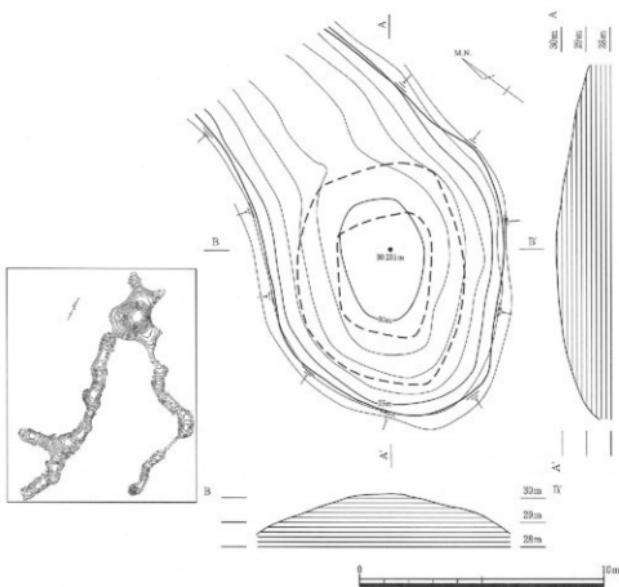
A10墳の南側に隣接しては、南北約4.5m、東西約3.8mの小さな平坦面が認められる。A10号墳とは主軸に大きなずれではなく、また著しい高低差もないが、A10号墳との関係を具体的に明らかにするには至らなかった。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また、埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(松木綾子)

#### A11号墳（第11図）

本墳は、A10号墳から南へ約21m、標高約30mの尾根上に位置する。南北約9.0m、東西約7.0m、高さ



第11図 A11号墳測量図（縮尺1/200、佐藤製図）

約0.5mの長方形を呈する方墳である。墳頂部には南北約5.0m、東西約3.5mの長方形を呈する平坦面が認められる。墳頂最高点の標高は30.231mを測る。

墳裾は、東側・西側とともに29.250～29.750m、南側で29.250～29.500m、北側で29.500～30.000mの等高線の間にそれぞれ位置する。平面形は全体的に丸みを帯びるが、墳丘西側の等高線が直線的となり、また南側へむけて直角に近く屈曲することなどから、墳形は方墳と判断される。

なお、段築や葺石の存在は確認されなかった。また、埴輪や土器などの遺物も採集されていない。

(佐藤雄太)

## 第5章 稲積オオヤチ古墳群の評価と意義

### 1 第2次調査成果のまとめ

これまでの記述をもとに、第2次調査の成果は、以下の諸点にまとめることができる。

1. A支群は、丘陵の最高所にもっとも規模の大きなA1号墳が築造される。そして、そこから南へ派生する小尾根上にA2a号・A2b号墳からA4号墳までの各古墳と、その下方には今回測量を行ったA5号墳およびA6号墳、さらに未測量だが前方後方墳のA7号墳と方墳のA8号墳が築かれる。また、南東へ派生する小尾根上にはA9号墳、A10号墳、A11号墳が築かれる。A1号墳墳頂部ともっとも低位にあるA8号墳墳頂部との標高差は約33.2mを測る。

2. 現状では樹木に覆われているが、いずれの古墳からも富山湾を一望することが可能である。

3. A5号墳については、これまで方墳と考えられてきた。あるいは、前方後方状を呈する可能性がわずかだが指摘されていたが、後方部の南面に低平な前方部が取り付く墳長約12.5mの小型の前方後方墳であることが明らかになった。後方部は一辺約9.0m、高さは約0.75～1.7m、前方部は長さ約3.5m、幅約4.0m、高さ約0.5mで、後円部と前方部の比高差は約0.3mを測る。後方部の北側墳裾部には幅約1.2mの溝が存在する。

4. A6号墳は、四周の墳裾はいずれも明確でないが、約9.5×4.0mの長方形を呈する比較的広い平坦面が認められることから、古墳と判断するに至った。

5. A9号墳は、約13.0×5.5m、高さ約0.7mの長方形を呈する方墳と推定される。墳丘の西側は崖による崩落で墳裾の大部分が失われている。しかし、北側部分の墳裾は直線的で、南側から東側にかけては等高線が隅丸方形状に巡り、また墳頂部には約5.5×4.5mの方形を呈する平坦面が認められる。

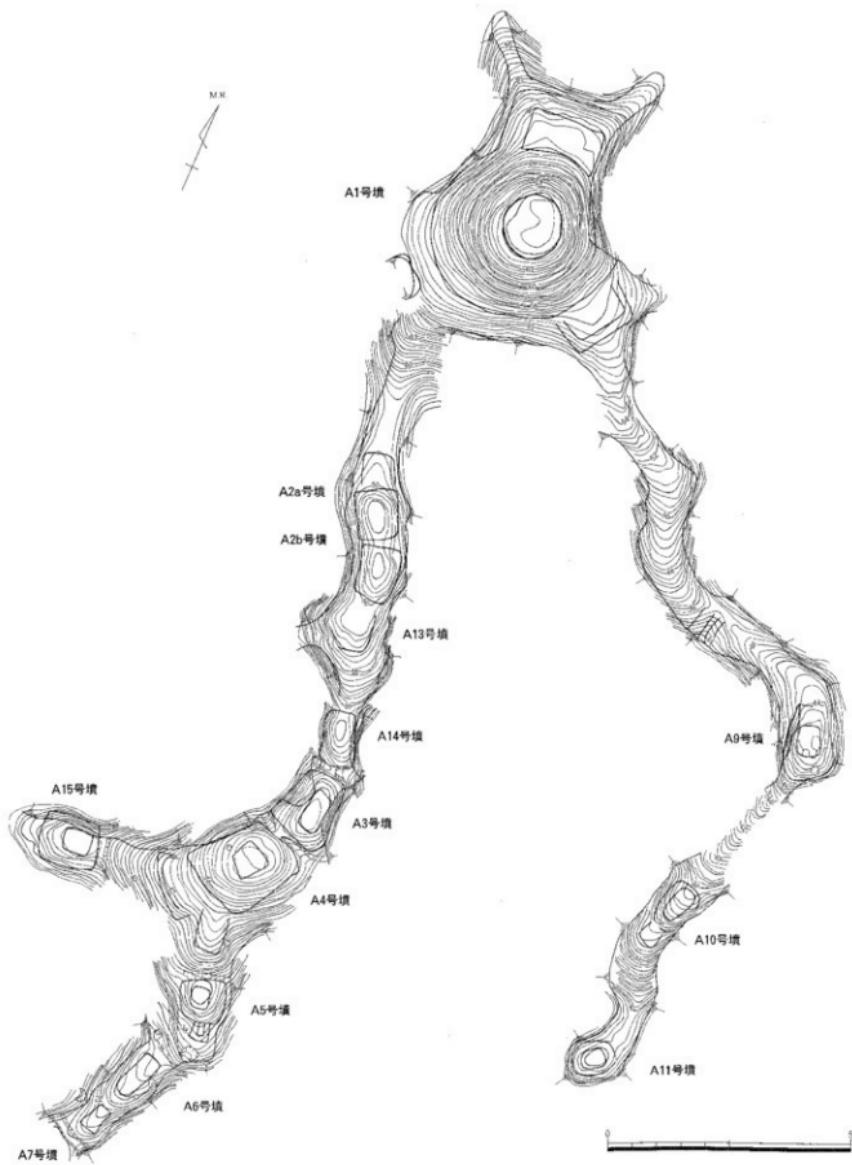
6. A10号墳は、約10.5×6.5m、高さ約0.7mの長方形を呈する方墳である。墳頂部は約7.5×4.0mの長方形を呈する平坦面となる。

7. A11号墳は、約9.0×7.0m、高さ約0.5mの長方形を呈する方墳である。墳頂部は約5.0×3.5mの長方形を呈する平坦面となる。

8. いずれの古墳からも段築や葺石は確認されていない。また、埴輪や土器なども採集されていない。

以上のように、第2次調査では5基の古墳を測量することができた。これによって、第1次調査と贈富山県文化振興財團による発掘成果を合わせると、稲積オオヤチ古墳群ではA7号・A8号墳を除く古墳について墳形や規模などが明らかにされたことになる。

ただし、古墳の築かれた尾根は崖による崩落が激しく、また山道などが通る。さらに、古墳群内には空堀状の遺構が認められる。隣接する丘陵上には中世の稲積城や阿尾城が存在しており、現況の墳丘についても山城などによる改変の可能性を考慮しておく必要がある。古墳間に見られる平坦面については、第1次・第2次調査を通じて、比較的広いものに関しては古墳の可能性を指摘した。A13号墳とA14号墳、A6号墳はこのように比較的広い平坦面の存在によって古墳と認識したものであるが、墳裾はほとんど遺存しておらず、今後さらなる検証が不可欠である。A12号墳については崖面に位置し、第3章で述べたおり古墳の登録は抹消されている。また、B4号とB5号墳については現在は一つの古墳であることが明らかにされている。このように、調査の進展によって古墳の認識が変わり、古墳群の通番に今後変更が生じる可能性があるだろう。なお、現時点における古墳群の通番を第2表のようにまとめておく。



第12図 稲積オオヤチ古墳群 A 支群古墳測量図（縮尺1/1000、増永製図）

第2表 稲積オオヤチ古墳群における各報告書の見解

番号	水見市	水見遺跡地図	第1次測量	第2次測量	飼當山埋文
A1号	A1号	A1号	A1号	A5号 A6号 A7号 A8号 A9号 A10号 A11号 抹消 A13号 A14号 A15号	A5号 A6号 A7号 A8号 A9号 A10号 A11号 A12号 A13号 A14号 A15号
A2a号	A2号	A2号	A2a号		
A2b号	A2号	A2号	A2b号		
A3号	A3号	A3号	A3号		
A4号	A4号	A4号	A4号		
A5号	A5号	A5号	A5号		
A6号	A6号	A6号	A6号		
A7号	A7号	A7号	A7号		
A8号	A8号	A8号	A8号		
A9号	A9号	A9号	A9号		
A10号	A10号	A10号	A10号		
A11号	A11号	A11号	A11号		
抹消	A12号				
A13号			A13号		
A14号			A14号		
A15号			A15号		
B支群	B1号	B1号	B1号		B1号
	B2号	B2号	B2号		B2号
	B3号	B3号	B3号		B3号
	B4号	B4号	B4号		B4号
	B5号	B5号	B5号		B6号
	B6号				

水見市：水見市教育委員会2001『水見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）』

水見市史編さん委員会2002『水見市史』7資料編5考古、水見市

水見遺跡地図：水見市教育委員会2007『水見市遺跡地図（第3版）』

第1次測量：富山大学人文学部考古学研究室2007『稲積オオヤチ古墳群－第1次調査報告書－』

第2次測量：本書

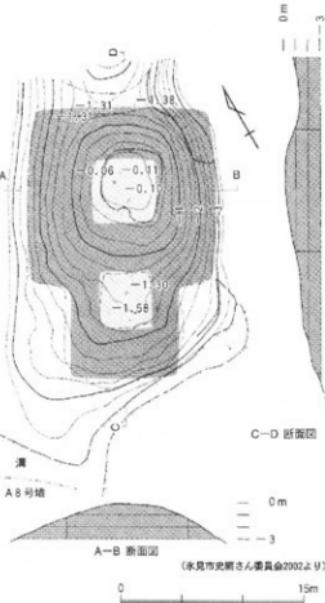
飼當山埋文：飼當山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2007『能登自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告 加納谷内遺跡隣接地 稲積オオヤチ古墳群宇波西遺跡』及び「水見市稲積オオヤチ古墳群 現地説明会資料」

## 2 稲積オオヤチ古墳群の評価

ここからは、これまでに得た情報を基に、あらためて各古墳の評価を行うとともに、稲積オオヤチ古墳群の歴史的意義についてまとめるにしたい。

稲積オオヤチ古墳群A支群では、最高所に墳長約46.5mの帆立貝形前方後円墳が存在し、そしてそこから距離にして33m以上、標高にして12m以上の間隔を置いた尾根の下側に、多数の方墳と2基の小規模な前方後方墳が築かれる。

方墳については、長辺を尾根方向におく長方形の平面形態をもち、尾根筋上に並んで築かれる。埴丘の高さはいずれも2m以下であり、横穴式石室のように規模が比較的大きく複雑な構造の埋葬施設は存在しないものと考えられる。これらの特徴は一般的に弥生時代の台状墓、あるいは弥生時代の遺制を残す古墳時代前期段階までの古墳に認められるものと言えるだろう。また、前方後方墳については、A5号墳は高さ2m以下の低平な後方部に、短小な前方部が取り付く。A7号墳は水見市史の見解によれば、後方部の長さ15m、幅16m、高さ3m、前方部の長さ8mで、20mを越える規模に比例して後方部はやや高い造りだが、前方部はA5号墳と同様に後方部の1/2程度の短小なものである。これらは初現期の前方



第13図 A7号墳測量図 (縮尺1/400)

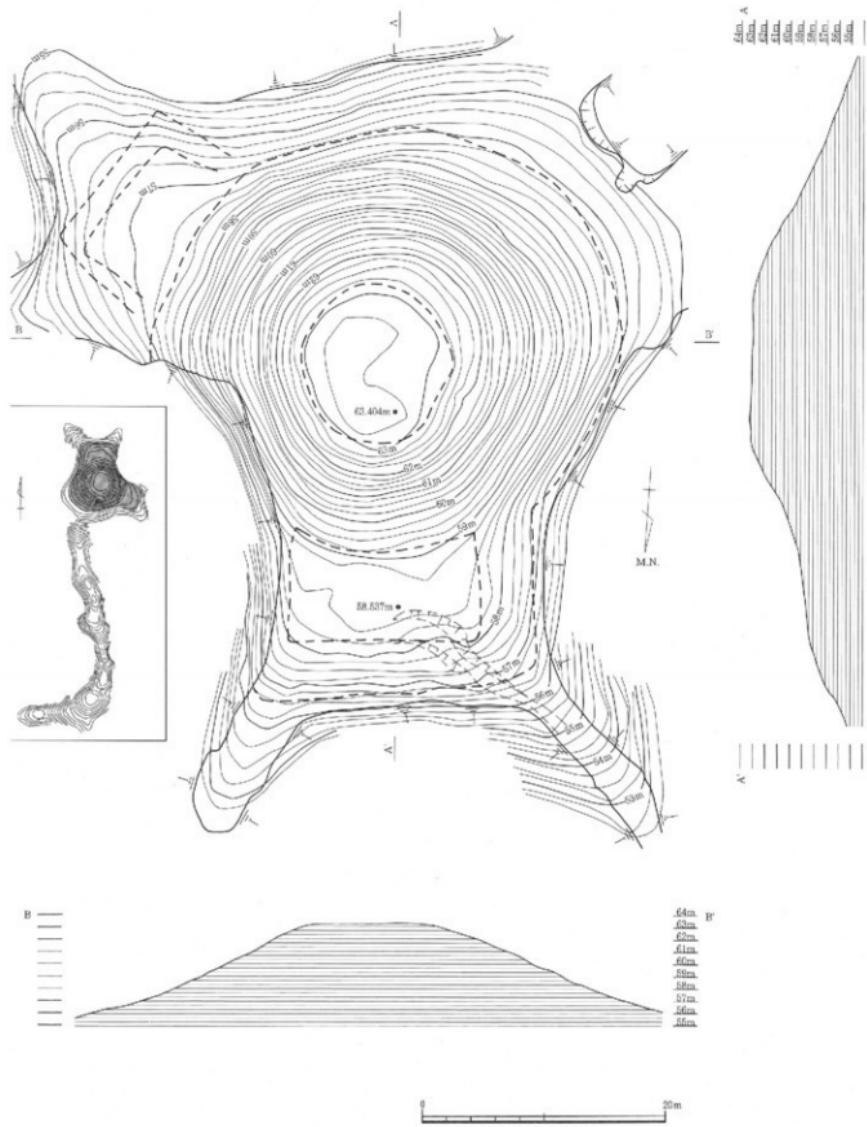
後方墳に特徴的な要素である。

帆立貝形前方後円墳については、すでに第1次調査報告書で次のような評価を行った。すなわち、A1号墳は正円形に近い後円部と幅広の前方部という形態をもつ。後円部頂および前方部頂には比較的広い平坦面が認められる。古墳前期段階のいわゆる「籠向型前方後円墳」のような低平短小な前方部をもつ古墳とは異なるものと言える。また、古墳南東面には比較的広い平坦面が存在する。帆立貝形前方後円墳に造出が付設される例は、北陸では古墳中期初頭段階の福井市免島長山古墳に認められており、今後はその性格をめぐってさらなる検討が必要である。築造時期等に関しては、水見市から石動山を越えた能登の邑知地溝帶（七尾市から羽咋市にかけての地域）に、帆立貝形前方後円墳の水白鍋山古墳と小竹ガラボ山古墳（ともに中能登町）、そして滝大塚古墳（羽咋市）が近在しており、同じ古墳中期に属することが推測される。仮にこの考えが成り立つならば、稲積オオヤチA1号墳は、立山町稚児塚古墳（直径46.2mの円墳）と並んで県内最大の中期古墳ということになるであろう。

稲積オオヤチ古墳群B支群では、合計5基の古墳が確認されている。A1号墳から距離にして約80mの間隔を置いた標高54mの地点にはB1号墳があり、その下側に一定の間隔をあけながらB6号墳、B2号墳、B3号墳のいずれも円墳が築かれる。そして、丘陵最先端の標高22mの地点に約36mの前方後円墳であるB4号墳が存在する。したがって、丘陵最高所に独立して築かれたA1号墳を除けば、A支群が方墳と前方後方墳で構成されるのとは対照的ななり方を示している。B4号墳は、前方部が後円部を凌駕する発達した形態をもち、また中心主体部からは長頸鐵が出土しており、築造時期は中期後半以降に比定される。B3号墳については築造時期は現時点では未詳であるが、古墳からの堅縛の出土は一般的に前期後半から末にはじまり中期になって増加するもので、とりわけ北陸においては前期に遡る例は稀少と言える。また、管玉は緑白色の軟質品で、漆玉も泥岩製であり、前期段階のものと比べて新しい傾向をうかがわせる。他の3基の円墳は遺物が出土していないが、墳形や立地的な関連性からB3号墳と時期的にあまり隔たりがないことが推定される。

これら各古墳を時期ごとに整理してみると、(A2a号・A2b号～A15号墳)→A1号墳→B3号・B4号墳(およびB1号・B2号・B6号墳)、という変遷が考えられる(このうち、築造時期がおおよそ特定できるのはA1号墳とB3号墳、B4号墳だけである)。したがって、稲積地区の丘陵上には、富山湾にもっとも近い小尾根の下側にまず小規模な前方後方墳と多数の方墳が並んで築かれ、その後は丘陵の最高所に46.5mの規模をもつ帆立貝形前方後円墳が単独で造営され、そしてこれと時期的に並行ないし後続して、やや奥まった小尾根上に前方後円墳と数基の円墳がつくられる、という関係が推測される。

方墳はいずれも10～15m前後と規模的な差が小さく等質的で、首長の墓とはみなし難いものである。そのような観点からすれば、約10基の方墳は、近隣集落の家長が数世代にわたって築いた墓と推測される。前方後方墳のA7号墳に関しては方墳と比較して相対的に規模が大きく、階層的な差異が存在する可能性が考えられる。しかし、隔絶した規模をもつというわけではなく、基本的には前方後方墳および方墳群内に首長の墓は含まれないものと考えられる。これら家長の古墳が築かれた後には、複数の系譜が統括されるような形で、帆立貝形前方後円墳が登場する。その後円部は36mを測り、また高さは6mを越え、60m台の前方後円墳の後円部規模に匹敵するものであり、副葬品等は未確認であるが、規模的に首長墳と判断することが可能と言える。B支群の各円墳との時期的な関係性は明確でない。B4号墳は墳長36mに留まるといえども、後期にかけて前方後円墳が衰退していく中にあって、富山県内の中期・後期に比定される前方後円墳の中では、小矢部市若宮古墳(墳長50m)、朝日長山古墳(墳長約43m)、富山市古沢塚山古墳(墳長約42m)に次ぐ規模を有している。



第14図 A1号墳測量図（縮尺1/400、富山大学人文学部考古学研究室2007より）

### 3 水見地域における首長系譜の変動

最後に、視野を水見地域の他の河川流域、さらには富山県内の他の地域にも広げるとともに、首長墳の変遷を通して、稲積オオヤチ古墳群の意義を考えてみることにしたい。

まず、小規模低平な多数の方墳や、これに1～2基程度の前方後方状の古墳が混在するあり方は、近在の稲積ウシロ古墳群や余川金谷古墳群など多くの地区で認められ、古墳出現期の墓域の構成として特別なものとは言えない。70m級の前方後円墳が現れるようになるのは、前期後半の阿尾島田A1号墳からである。そして、やや遅れて100m級の前方後方墳である柳田布尾山古墳が仏生寺川流域に登場する。水見地域に相次いで築かれた阿尾島田A1号と柳田布尾山の両墳は、この時期を代表する首長墳と言うことができるだろう。しかし、阿尾島田古墳群では、A1号墳に後続する大型墳は存在せず、その後は約30mの円墳1基を中心にして10～20m前後の円墳などが尾根上に並んで築かれるだけである。

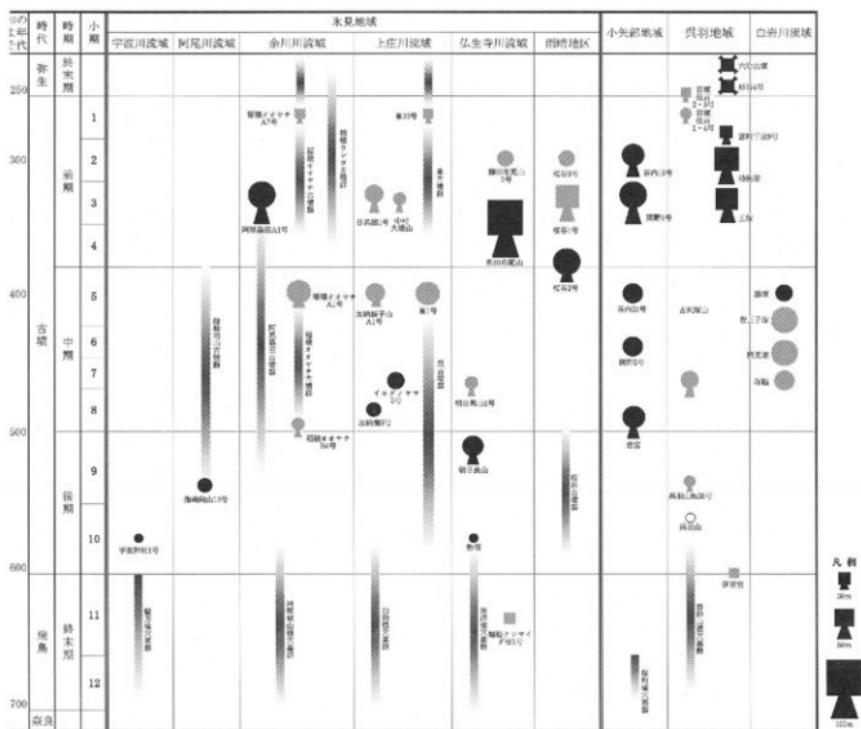
柳田布尾山古墳の周辺にも後続する大型墳は認められない。次代の首長墳は海岸沿いの雨晴地区にある桜谷2号墳へ移動する。桜谷2号墳は約50mの前方後円墳ないし帆立貝形前方後円墳で、石剣5点などを有し、前期末葉から中期初頭に比定される。桜谷古墳群では、他に1基の前方後方墳と数基の円墳があるが、前者は2号墳より以前に、後者は主として後期以後に比定されるものであり、したがって中期には古墳群の造営がいったん停止するものと言える。他には、上庄川流域の日名田1号墳（約44mの前方後円墳）や中村天場山古墳（約32mの前方後円墳）などが存在するが、時期は未詳である。

一方、中期になると、稲積オオヤチ古墳群では突如、約46.5mの帆立貝形前方後円墳のA1号墳が登場する。周辺には阿尾島田古墳群内に数基の円墳などが築かれるが、規模は30m以下である。その他、泉1号墳（約43mの円墳）や上田1号墳（約44mの円墳）、朝日潟山1号墳（約34mの前方後円墳）、加納蛭子山A1号（約33mの帆立貝形前方後円墳）などが水見地域に存在するが時期は明らかでない。富山県内の他の地域に視野を広げると、中期においては他に、富山市若王子塚古墳と立山町稚児塚古墳（ともに46mの円墳）、富山市古沢塚山古墳（約42mの前方後円墳）が推定されるが、いずれにしても稲積オオヤチA1号墳の規模を大きく越える古墳は存在しない。

また、上庄川流域には中期後葉に比定されるイヨダノヤマ3号墳が築かれる。規模は20.5mに留まるものの、畿内政権からの配布品と考えられる横矧板鉄留短甲が群集墳内の中小古墳にまで副葬されるようになる点は重要である。地域は異なるが、小矢部市谷内古墳群では、前方後円（方）墳の築造が前期に断絶した後、中期初頭になって直径30mの谷内21号墳が築かれる。谷内21号墳では、割竹形木棺内から三角板革綴短甲、長方板革綴短甲、頸甲、肩甲、革草履各1と鉄刀1、鉄劍2、鐵鎌60、堅櫛約40が出土して



第15図 水見地域の地形と主な古墳



第16図 氷見地域の主要古墳編年と県内の主な古墳

( ) は墳形・時期が確定・推定できるもの、( ) は時期的根拠が弱いもの、○□ は墳形不明のもの、\_\_\_\_\_ は古墳群および横穴墓群

おり、堅櫻を除くと棺内出土品は武器・武具で占められ、被葬者の武人的な性格が示唆されるとともに、同じく畿内政権との深い関係が推測される。このように中期には、軍事編成を通じて、地域の首長層を支える立場にある中小古墳の被葬者までもが畿内政権に掌握されるようになったと考えられる。

後期には、仏生寺川下流域の一支流である渓川を眼下に富山湾を一望できる丘陵の先端部に約43mの前方後円墳である朝日長山古墳が築かれる。後期前葉に比定される朝日長山古墳は、前方後円墳が衰退していく後期の段階にあって40mを越える規模をもち、また金銅製冠帽飾りや金銅張り馬具をはじめとする豊富な副葬品と、富山県内では他に小矢郡市若宮古墳でしか出土していない埴輪を有しており、首長墳と捉えることが可能である。富山県の後期においては他に、前方部が大きく開く形態を示す吳羽山丘陵No.26古墳（墳長約20m）が推定されるものの、現時点では朝日長山古墳より確実に新しい前方後円墳は認められない。また、40mを越える複数の古墳も以降は築かれなくなる。

水見地域にみられる大型墳をあらためて編年すると、阿尾島田 A1号墳（前期後半）→柳田布尾山古墳（前期後半）→桜谷 2号墳（前期末葉～中期初頭）→稲積オオヤチ A1号墳（中期）→朝日長山古墳（後期前葉）となる。これを流域または地区別にみると、余川川流域、仏生寺川流域、雨晴地区を経て、

再び余川川流域へ戻り、そして仏生寺川卜流域へというように、大型墳の造営地がほぼ一代ごとに興起と衰退を繰り返しながら移動していることがわかる。これらは各時期の水見地域を統括する首長の古墳と捉えることが可能である。それとともに、とりわけ規模の大きな柳田布尾山古墳や豊富な出土品を有する桜谷2号墳、朝日長山古墳については、これらに匹敵する同時期の古墳が県内では他に認められないことから、水見地域を越えてさらに広域の地域圈を統括する被葬者像が推測される。また、日名田1号や中村天場山、泉1号、上田1号、朝日潟山1号、加納蛭子山A1号、イヨダノヤマ3号の各古墳などは、各時期の河川流域を代表する首長層あるいは有力家長層の古墳とすることができる。稲積オオヤチB4号墳については、発達した前方部形態と副葬品として長頭鐵をもち、築造時期は今後正報告書で明らかにされるであろうが、時期的に近接する朝日長山古墳と比較して、規模が小さく、また鐵鐵の点数や他の出土品の数量も少なく、階層的な関係が推測される。

このように、水見地域には前期から後期を通して相対的に大型の古墳が築かれており、首長系譜の継続と断絶を考える上で重要なフィールドの一つと言つてよい。大型墳の築造背景としては、一般的に、水田稲作などの生産基盤を通じた地域内の内部発展の結果と結び付けて考えられる。しかしながら、水見地域におけるこれらの大型墳の築造背景を、内部発展だけに結びつけて考えることにはやや躊躇する。なぜなら、阿尾島田A1号墳や柳田布尾山古墳、稲積オオヤチA1号墳はそれ以前に遡る周辺の古墳と比較して規模が格段に大型化しており、また桜谷2号墳、朝日長山古墳では副葬品の様相に飛躍的な変化が見られ、加えて水見地域は平野面積が狭く、仏生寺川および上庄川の流域には当時は潟湖が広がっていたと推定されており、可耕地はさらに限定的なものであったと考えられるからである。このことを逆説的に解釈するならば、水田稲作などを通した生産基盤が不安定であったからこそ、同じ古墳群内で大型墳の造営が数世代にわたって継続せず、首長系譜が断絶する要因となったことが考えられる。水見地域における首長墳の築造背景としては、他に日本海交通・交流を通じた首長層の台頭が考えられる。立地的にはいずれも富山湾や潟湖に近接して築かれている。また、阿尾島田A1号墳出土の鉄鎌（主頭式・有孔三角式）や鑿、刃部鎌形タイプの鉈は畿内の前期古墳には一般的でなく、日本海沿岸をはじめとした広い範囲に多くの類例が存在し、ガラス連玉と錫小玉は北部九州や丹後に類例が見られる。朝日長山古墳についてもその埋葬施設は竪穴系横口式石室と推定され、この形態を含めて北部九州系横穴式石室をもつ古墳が若狭から能登の日本海沿岸に多く分布する点は注目される。地域内の内部発展に加え、他地域との交通・交流を通じて地域政権が成長し、またそれとともに能登をはじめとした日本海沿岸諸地域との地域連合の形成がすすむと、畿内政権による首長層の掌握がいっそう強化されるようになったことが考えられる。それまで首長墳が存在しなかった場所に突如古墳群が形成されることや古墳の規模が急激に拡大すること、石剣や金銅張り馬具等を副葬されること、段築や埴輪をもつこと、また逆に首長系譜の断絶や墳丘規模の縮小化、墳形の変化などはその表れだと考えることができるだろう。

したがって、稲積オオヤチ古墳群は、その形成期には地縁集団的な性格が強い古墳からなっていたが、中期には地縁的集団の枠組から脱却し、水見地域において階層的に最上位に君臨する首長の墓域へと変貌を遂げたことが考えられる。しかし、稲積オオヤチA1号墳は、埋葬施設や副葬品等は未詳の段階であるが、柳田布尾山など前期における水見地域の首長墳と比べて墳形の変化や相対的な規模の縮小がみられ、また同じ中期に属する帆立貝形前方後円墳の福井市免島長山古墳（墳長90.5m）や羽咋市滝大塚古墳（墳長90m）と比較すると約1/2の規模に留まるものである。その築造過程を明らかにすることは、中期における首長系譜の変動だけでなく、他地域の首長との政治的関係を探る上でも重要と言える。

稲積オオヤチ古墳群については、その概観にふれただけで、さらなる検討や調査の必要性がある。また、

古墳埋葬施設の発掘例は県内ではまだ少なく、比較研究の過程にある状況と言えよう。今後は、研究や調査の進展をまって、首長系譜の変動や築造背景などをあらためて再評価することが不可欠である。

(高橋浩二)

#### 参考文献

- 側富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2007『水見市稲積オオヤチ古墳群 現地説明会資料』
- 高橋浩二2007『富山の古墳－水見・雨晴の首長と日本海－』日本海学研究叢書、富山県・日本海学推進機構
- 富山大学人文学部考古学研究室2007『稲積オオヤチ古墳群－第1次調査報告書－』
- 富山大学人文学部考古学研究室2007『阿尾島田古墳群の研究－日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究－』、平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書
- 水見市史編さん委員会2002『水見市史』7資料編5考古、水見市

# 図 版

1



1 A4号墳南側平坦面（北から）



2 同左（南から）



3 同上（南東から）



4 A5号墳後方部（北から）



5 A5号墳前方部（南東から）



6 同左（北から）



7 A6号墳全景（北から）



8 同左（北から）



9 A9号墳全景（北から）



10 A9号墳墳頂部平坦面（南東から）



11 A10号墳全景（北から）



12 同左（南から）



13 A10号墳南側平坦面（南から）



14 同左（北から）



15 A11号墳全景（北から）



16 同左拡大（北東から）



17 同上（南から）



18 A9号墳北西側の堀切（西から）

ふりがな	いなづみおおやちこふんぐん				
書名	稲積オオヤチ古墳群				
副書名	第2次調査報告書				
巻次					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	高橋浩二				
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室				
所在地	〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL 076(445)6195				
発行年月日	2008年3月31日				
所収遺跡名	所在地	北緯 ○' ″	東緯 ○' ″	調査期間	調査面積(㎡)
稲積オオヤチ古墳群	水見市稲積	36度 52分 51秒	136度 58分 39秒	20070801 ～20070810	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲積オオヤチ古墳群	古墳	古墳	帆立貝形前方後円墳1基、前方後方墳2基、方墳12基	なし	稲積オオヤチ古墳群A支群の測量を実施した。その結果、A5号墳は約12.5mの前方後方墳、A6号・A9号・A10号・A11号墳は10m前後の方墳と判断された。第1次調査の成果と合わせると、A支群には墳長約46.5mの帆立貝形前方後円墳1基、前方後方墳2基、方墳12基が存在するものと考えられるが、墳形や規模等についてはなお検討が必要である。A支群の古墳の造営時期は前期～中期と推定される。

2008年3月30日印刷

2008年3月31日発行

### 稲積オオヤチ古墳群

－第2次調査報告書－

編集・発行 富山大学人文学部考古学研究室

〒930-8555 富山県富山市五福3190

TEL 076-445-6195

印 刷 あけぼの企画株式会社